

授業で使える当館所蔵地図

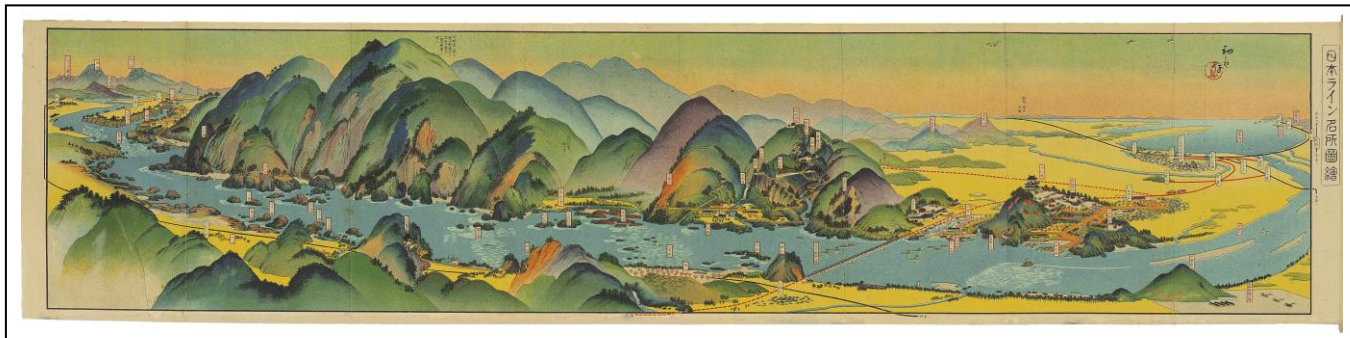
No. 43 『日本ライン名所図絵』

発行年：1923（大正12）年

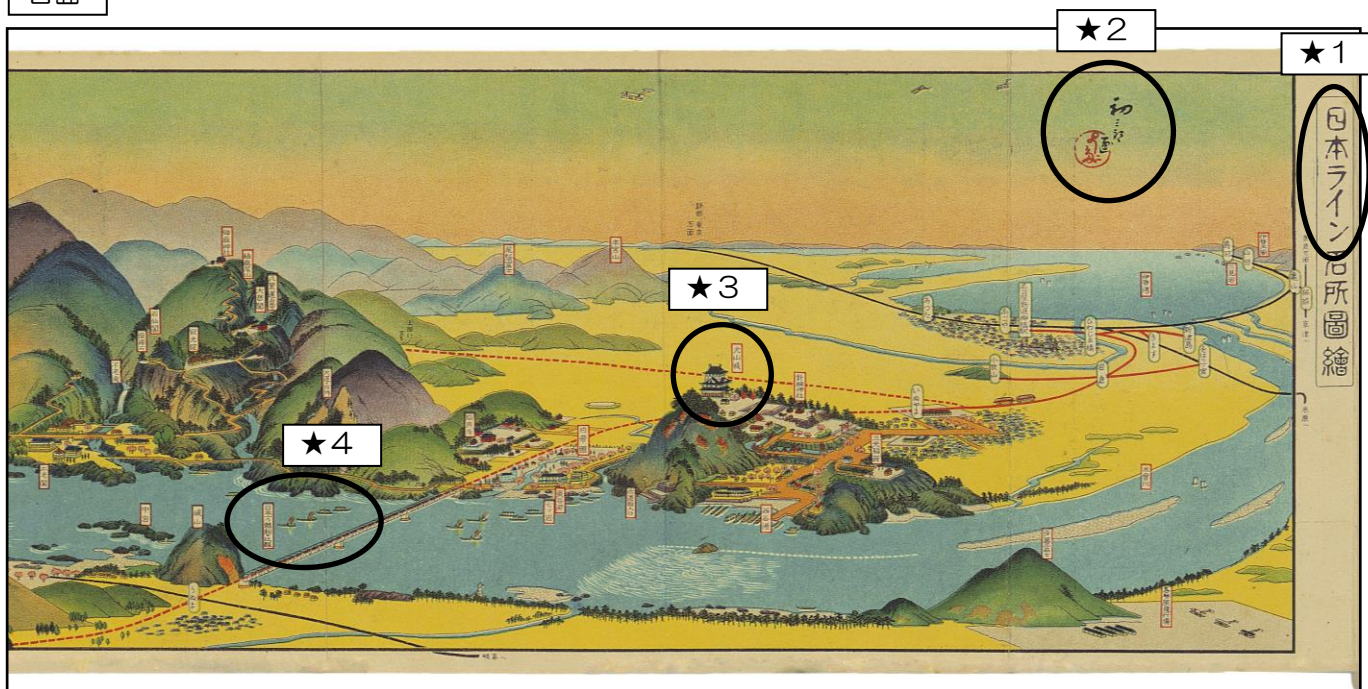
サイズ：16×74cm

作者：吉田初三郎

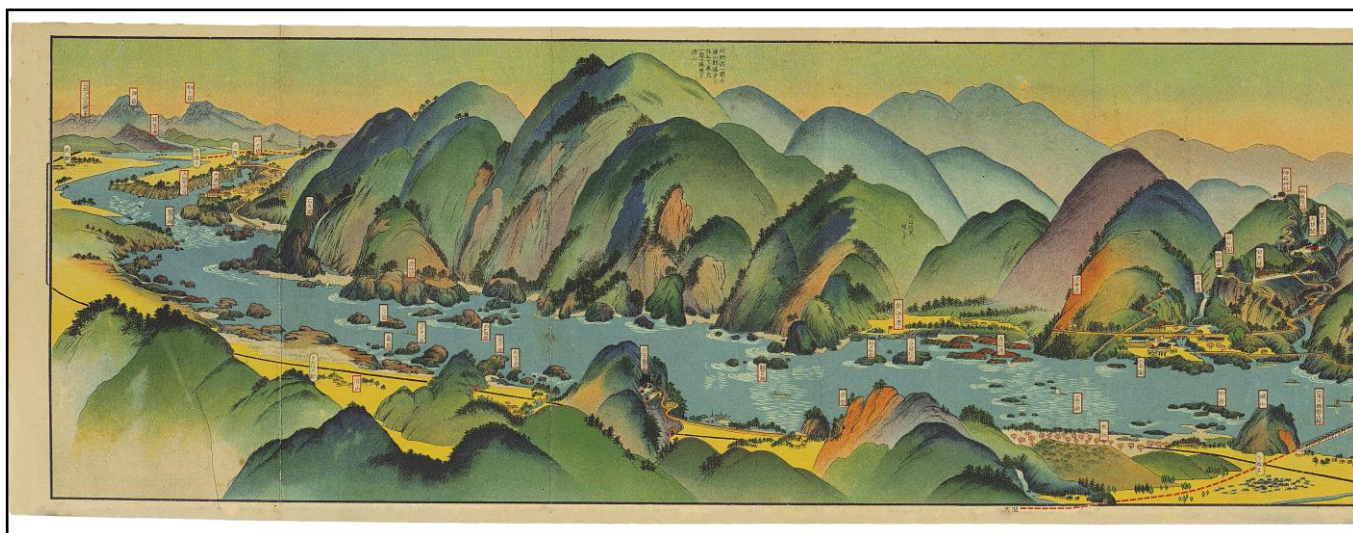
原図



右面



左面



【解説】

日本ラインは、志賀重昂（しがしげたか）が1913（大正2）年、ドイツのライン川の景勝地に似ているところから命名した。木曾川と飛騨川の合流点の今渡から、下流の犬山城付近までの峡谷約13kmをいう。この図は、1923（大正12）年、初めてここを訪れた初三郎が峡谷の美しさに感動して描いたものである。その後、関東大震災で東京の画房等が焼失したため、名古屋鉄道専務上遠野富之助（かどのとみのすけ）から日本ライン沿いの施設の提供を受け、仮本拠地とした。出版会社も大正名所図絵社から観光社と改名し、ここを拠点に多くの代表作品を製作した。

この図はその時の作品で、日本ライン左岸の連山連溪を正面にし、奇岩絶壁の間、不老瀧や犬山城付近を詳しく描き、犬山橋付近には鶺鴒や観光船、右岸の岩屋観音、城山も入れている。

★1 日本ライン

岐阜県南部、木曾川中流にある渓谷。木曾川と飛騨川の合流する地点から、下流の犬山市までの約13kmにあたり、飛騨木曾川国定公園を代表する観光名所の1つである。名前の由来は、ヨーロッパを流れるライン川の渓谷を連想させることによる。

美濃加茂市の太田橋から小舟に乗り、両岸に色とりどりの奇岩や絶壁がつづく激流を下り、景色を楽しむ日本ライン下りは有名である。終点の丘の上には、国宝の犬山城がある。

★2 吉田初三郎

1884年3月4日京都市中京区に生まれた。初めは友禅図案の職工として奉公に出て、その後の1909年、洋画家の鹿子木孟郎に弟子入りした。西洋画を志すが果たせず、師匠に「まだ誰もやっていない商業画を目指したらどうか」と勧められて鳥瞰図に取り組み始めた。

大正から昭和にかけての日本の観光ブームによって、初三郎の鳥瞰図の人気は高まり、大正名所図絵社を設立する。国内の交通行政を所轄し、観光事業にも強い影響力を持っていた鉄道省を筆頭に、鉄道会社やバス会社、船会社など各地の交通事業者、旅館やホテル、地方自治体、新聞社などが顧客であった。しかし、第二次世界大戦が進む中、初三郎式鳥瞰図は港湾等の軍事機密が見取れ、「地政学上好ましくない」という軍部の判断のもと、不遇の時代を送った。戦後、初三郎が最初の大きな仕事として引き受けたのは、広島原爆の被害を鳥瞰図にする仕事であった。昭和天皇を敬愛し、日本を愛した初三郎は、渾身の図をまとめ、世を去ることになった。

★3 犬山城

愛知県犬山市にある日本最古の平山城。白帝城ともよばれる。木曾川の左岸にある高台に設けた本丸のまわりに4つの囲いを配置した城で、1469年に尾張国（現在の愛知県）の守護大名斯波氏の家臣だった織田広近がふもとに最初に城を築いた。現在の場所に移ってからは、池田恒興・石川光吉・小笠原吉次などが城主となった。後世の天守閣にはみられない様式の美しい天守閣をもち、国宝に指定されている。

★4 鶺鴒

水鳥のウ類が水にもぐって魚をとらえる習性を利用した漁法。日本以外では、中国やヨーロッパ・エジプト・南アメリカ・インドなどで行われていた。鶺鴒にはウに縄をつける「つなぎ鶺鴒」、縄をつけない「放ち鶺鴒」がある。また舟を使う方法と歩いて行う方法がある。日本では8世紀以前から行われていた。この絵図に描かれている鶺鴒は、舟を使ったつなぎ鶺鴒で、昔からの伝統を守り、かがり火をたよりに行われる。340余年伝統を誇る木曾川鶺鴒は、網を付けた8～10羽の鶺鴒に魚を捕らせる古典的な漁法である。

【活用の例】

○犬山城から平山城を知ることができる。

→高等学校日本史Bの近世の学習において、近世の城の特徴を視覚的に学ぶことができる。近世の城は、軍事施設としての機能と城主の居館・政庁としての機能を合わせ持つようになり、中世の山城から小高い丘の上に築く平山城や平地に築く平城に変化した。

○木曾川鶺鴒の様子を伺うことができる。

→中学校歴史的分野の「身近な地域の歴史を調べる活動」において、木曾川鶺鴒の歴史について調べる活動の中で活用できる。

○日本ラインを地形的に知ることができる。

→中学校地理的分野の「身近な地域の調査」や高等学校地理Aの「身近な地域の課題と地域調査」において、日本ラインを題材にして地域調査を行い、その地形の特徴を確認することができる。

【参考文献】

- ・総合百科事典ポプラディア（ポプラ社、2005年）